

A 基礎 祇園精舎の言葉とたとえ

答えと考え方

問1 歴史的仮名遣い

答え ついに

解説 「ひ」を「い」に直す。「最後には」は意味であり、仮名遣いの答えではない。

問2 古語

答え エ

解説 ここでは自分の勢いや力を頼みにして思い上がる人のこと。「食事をおごる」とは異なる。

問3 否定の意味

答え イ

解説 栄えている状態が長く続かないと述べる。「ず」は打消しを表す。

問4 たとえの対応

答え 春の夜の夢

解説 「ただ春の夜の夢のごとし」が対応する。風の前の塵は、その後の「猛き者」に対応する。

確認 指定に合う表記・内容であること。

問5 たとえの対応

答え 風の前の塵

解説 風に吹かれてすぐに散ってしまううちに重ねる。強い力を持つ者も永続しないことを示す。

確認 指定に合う表記・内容であること。

A 基礎 祇園精舎の言葉とたとえ 続き

答えと考え方

問6 対句

答え 花の色

解説 前半二文は「祇園精舎の鐘の声」と「娑羅双樹の花の色」が、音と色の描写として対応する。

確認 指定に合う表記・内容であること。

問7 漢語の意味

答え ア

解説 盛んな者も必ず衰えるという意味。強い者が永久に強いという考えとは逆になる。

問8 現代語訳

解答例 勢いの強い者も、最後には滅んでしまう。

解説 「ぬ」はここでは完了の意味を表す。「滅びない」と打消しにすると、冒頭全体の内容と反対になる。

別解・許容 強い力を持つ者も、ついには滅びてしまう。

本文の現代語訳

① 祇園精舎の鐘の音には、世のすべてのものが変わり続けるという響きがある。娑羅双樹の花の色は、栄えている者も必ず衰えるという道理を示す。おごり高ぶる人も長くは続かず、まるで春の夜に見る夢のようだ。勢いの強い者も最後には滅んでしまう。全く風の前のちりと同じである。

B 標準 扇を射る前の状況と祈り

答えと考え方

問1 歴史的仮名遣い

答え いずれ

解説 この語では「づ」を「ず」に直す。意味を答える問題ではない。

問2 古語と文脈

答え ウ

解説 ここでは天候ではなく、大勢の注目を集める表立った場を表す。直前で両軍が見物することが示されている。

問3 因果関係

解答例 北風が激しく波が高いため、舟が上下に揺れているから。（26字）

解説 自然の条件から舟の動きへ、さらに扇が安定しないことへつなぐ。扇を持つ人がわざと動かしたとは書かれていない。

別解・許容 強い北風で波が高く、舟が上がったり下がったりして揺れるから。

確認 強い北風／高い波／舟の揺れ、の3点。

問4 位置関係

解答例 平家＝沖。源氏＝陸。

解説 「沖には平家」「陸には源氏」という対になった文をそのまま対応させる。

別解・許容 海上、岸／沖の舟の上、陸の馬上

問5 禁止を含む願い

解答例 この矢を外させないでください。

解説 「給ふな」はここでは相手への禁止を含む願い。神仏に、的を外すことのないように頼んでいる。

別解・許容 どうか、この矢が的を外れないようにしてください。

B 標準 扇を射る前の状況と祈り 続き

答えと考え方

問6 言葉の示し方

答え エ

解説 会話が閉じた後の「心の内に祈念して」に注目する。声に出して敵に叫んだとは書かれていない。

問7 変化の読み取り

解答例 風が少し弱くなっていた。

解説 「風少し吹き弱つて」を押さえる。風が完全に止んだ、海が全く動かなくなったとまでは書かれていない。

別解・許容 風が少し吹き弱っていた。

問8 心情と根拠

解答例 失敗すれば二度と人に顔を向けられないほど、重大な恥だと考えている。(33字)

解説 与一自身が失敗を非常に重く受け止めていることを述べる。読み手の価値観を一般的な教訓として広げる必要はない。

別解・許容 人前に顔を出せなくなるほど、射損じることを重大に考えている。

確認 失敗／人に顔を向けられない／重大な恥や重い責任として捉える、の3点。

本文の現代語訳

① 時は二月十八日、午後六時ごろのことで、その時ちょうど北風が激しく、岸に打ち寄せる波も高かった。舟が上がったり下がったりして揺れるので、扇も串の上に安定せず、ひらひらしていた。沖では平家が舟を一面に並べて見物する。陸では源氏が馬を並べてこれを見る。どちらにとっても、大勢に見られる晴れの間でないということはない。

② 与一は目を閉じて、「八幡大菩薩よ、とりわけわが国の神々、日光権現、宇都宮、那須湯泉大明神よ、どうかあの扇の真ん中を射させてください。射損じるようなら、弓を折って自害し、再び人に顔を向けることはできません。もう一度故郷に迎えようとお考えなら、この矢を外させないでください」と心の中で祈り、目を開くと、風が少し弱まり、扇も射やすい状態になっていた。

C 応用 一矢と両軍の反応

答えと考え方

問1 歴史的仮名遣い

答え ひょう

解説 「ひやう」は「ひょう」となる。小さい「ょ」にして書く。

問2 動作の主体

解答例 那須与一

解説 この一連の動作は、文頭の「与一」が行う。扇や平家が矢を放つのではない。

別解・許容 与一

問3 動作の正確さ

答え 過たず

解説 「過たず」は間違えず、狙いを外さずということ。後に扇を射切った位置が示される。

確認 指定に合う表記・内容であること。

問4 順序

解答例 イ→ウ→ア

解説 矢は海へ入る一方、扇はまず空へ上がり、風にもまれた後に海へ落ちる。二つのものの動きを混同しない。

別解・許容 イ・ウ・ア／イウア

問5 色の対照

解答例 紅色、白色

解説 「皆紅の扇」と「白波」が対応し、赤い扇と白い波の組合せが鮮やかさを生む。

別解・許容 赤、白／紅、白

C 応用 一矢と両軍の反応 続き

答えと考え方

問6 反復する動き

解答例 浮いたり沈んだりを繰り返す動き。(16字)

解説 二つの動詞が並び、水面で上下する様子を表す。「浮かない、沈まない」という打消してはない。

別解・許容 波の上で浮き沈みを繰り返すこと。

確認 指定に合う表記・内容であること。

問7 反応の比較

解答例 平家は舟べり、源氏は箆をたたき、どちらも与一の見事な技に感動している。(35字)

解説 敵味方で場所やたたく物は違っても、見事な技に感じ入り、たたいてたたえる点が共通する。

別解・許容 平家も源氏も、それぞれ舟べりや箆をたたいて、与一の技をたたえている。

確認 平家の舟べり／源氏の箆／技への感動や称賛、の3点。

問8 表現の効果

答え イ

解説 音や動きを短い言葉で示すことで、矢を放つ瞬間や扇の落下を目の前のように感じさせる。

本文の現代語訳

① 与一は鎚矢を取って弓につがえ、十分に引き絞って、ひょうと放った。小柄とはいっても、矢は十二束三伏という長さで、弓も強い。鎚矢は入り江じゅうに響くほど長く鳴り、狙いを外さず、扇の要から一寸ほど離れた所を、ひいふっと射切った。鎚矢は海に入り、扇は空に上がった。春風に一、二度もまれて、海へさっと散り落ちた。真っ赤な地に日の丸を描いた扇が夕日に輝き、白波の上に浮いたり沈んだりして揺れているのを見て、沖の平家は舟べりをたたいて感嘆した。陸の源氏は矢を入れる道具をたたいて、どっと声を上げた。

D 確認テスト 言葉・情景・人物

確認テスト 100点 採点基準付き

問1 歴史的仮名遣い〔10点〕

答え ひとえに

解説 この語では「へ」を「え」に直す。意味の「まったく」を書く問題ではない。

採点 ひとえにで10点。

問2 考え方〔10点〕

答え ウ

解説 すべてのものは変化し、同じ状態のままではないという考え方。鐘がいつまでも鳴るという意味ではない。

採点 ウで10点。

問3 動作の主体〔10点〕

解答例 与一、扇

解説 前者は祈っていた与一、後者は明示された扇が主語。与一の矢と扇の動きを区別する。

別解・許容 那須与一、扇

採点 与一5点／扇5点。

問4 抜き出し〔10点〕

答え 久しからず

解説 「久しからず」は長続きしないという否定。「春の夜の夢」はそのことを示すたとえになる。

採点 原文どおりの5字で10点。

D 確認テスト 言葉・情景・人物 続き

確認テスト 100点 採点基準付き

問5 たとえの共通点〔15点〕

解答例 どちらもはかなく消え、人の強い勢いも長く続かず失われることを表す。(33字)

解説 単に「夢と塵」と並べず、消えやすさと、人の栄えや勢いの一時性との関係を説明する。

別解・許容 すぐに消えてしまう点が共通し、栄えている人の力も長続きしないことを示す。

採点 夢・塵のはかなさ7点／人の栄え・勢いの持続しなさ8点。

問6 状況と心情〔15点〕

解答例 風や波で舟と扇が揺れ、狙いを定めにくい上、平家と源氏の両軍が見物している。(37字)

解説 自然による難しさと、両軍の注目という二種類の条件を分ける。単に「緊張する」だけでは条件を説明できない。

別解・許容 高い波で扇が安定せず、しかも海の平家も陸の源氏も見ていること。

採点 風波・舟・扇の揺れによる難しさ8点／両軍が注目すること7点。

問7 現代語訳〔15点〕

解答例 鎬矢が海に入ると、扇は空へ上がった。

解説 矢と扇の二つの主語と、海・空という行き先を保つ。「ぞ」をそのまま現代語の語尾の「ぞ」にしない。

別解・許容 鎬矢は海に入り、扇は空に舞い上がった。

採点 鎬矢が海へ7点／扇が空へ8点。

問8 内容の範囲〔15点〕

答え ア

解説 敵の平家も味方の源氏も感動していることは分かるが、降伏や終戦までは書かれていない。

採点 アで15点。

D 確認テスト 言葉・情景・人物 続き

訳と解説

本文の現代語訳

- ① 祇園精舎の鐘の音には、世のすべてのものが変わり続けるという響きがある。娑羅双樹の花の色は、栄えている者も必ず衰えるという道理を示す。おごり高ぶる人も長くは続かず、まるで春の夜に見る夢のようだ。勢いの強い者も最後には滅んでしまう。全く風の前のちりと同じである。
- ② 時は二月十八日、午後六時ごろのことで、その時ちょうど北風が激しく、岸に打ち寄せる波も高かった。舟が上がったり下がったりして揺れるので、扇も串の上に安定せず、ひらひらしていた。沖では平家が舟を一面に並べて見物する。陸では源氏が馬を並べてこれを見る。どちらにとっても、大勢に見られる晴れの間でないということはない。
- ③ 与一は目を閉じて、「八幡大菩薩よ、とりわけわが国の神々、日光権現、宇都宮、那須湯泉大明神よ、どうかあの扇の真ん中を射させてください。射損じるようなら、弓を折って自害し、再び人に顔を向けることはできません。もう一度故郷に迎えようとお考えなら、この矢を外させないでください」と心の中で祈り、目を開くと、風が少し弱まり、扇も射やすい状態になっていた。
- ④ 与一は鎗矢を取って弓につがえ、十分に引き絞って、ひょうと放った。小柄とはいっても、矢は十二束三伏という長さで、弓も強い。鎗矢は入り江じゅうに響くほど長く鳴り、狙いを外さず、扇の要から一寸ほど離れた所を、ひいふっと射切った。鎗矢は海に入り、扇は空に上がった。春風に一、二度もまれて、海へさっと散り落ちた。真っ赤な地に日の丸を描いた扇が夕日に輝き、白波の上に浮いたり沈んだりして揺れているのを見て、沖の平家は舟べりをたたいて感嘆した。陸の源氏は矢を入れる道具をたたいて、どっと声を上げた。